

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの苦勞があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。「おとふけ」の伝承は広報おとふけで平成25年10月号から不定期に30回掲載し、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話を紹介してきましたが、今回で最終回となります。

そこで、今回はこれまで30回の伝承全てに聞き手として関わっていただいた飛岡久さんに、これまでの伝承の振り返りと皆さんへのメッセージを寄稿いただきました。



飛岡久さん (95歳)

昭和2年生まれ。

長年、小学校教諭として教壇に立ち、退職後は音更郷土史研究会を設立し、会長を務められました。本町のみならず十勝の歴史や文化に関する調査や研究を続け、本町の文化の向上や生涯学習の推進に尽力されています。

「伝承」から学んだこと

伝

承は、音更町に住み、それぞれの分野で活動した人々の歩みを「聞き取り調査」し、それを「町広報紙」に記載したものです。今回は総勢29人の方々の記録で、その活動について特徴的な点を中心にまとめました。

①戦前の日中戦争、太平洋戦争、そして敗戦、「ポツダム宣言」を受諾した時代でした。戦後シベリア抑留された後、音更村の開拓地に入植した方。旭川師範学校生徒で、自分たちの絵画が「治安維持法」に触れ、刑務所に留置され、その後海軍に入隊した方。戦後教職

に就き、退職後は音更町に定住した方。また戦時中に東京空襲に遭い、知人を頼りに、上然別に着き、農業に従事された家族。さらに音更村に米軍機による空爆があり、妹が犠牲となり、その対処に当たった兄の方。樺太やその他の引き揚げ者の援助に協力した方など、11人の方がいました。

②戦前音更村の農村で小作人として農業に従事していましたが、戦後「農地改革」が実施され「自作農」になった方が3人いました。心から喜びあったとのこと。③寺院の僧侶修業のため、各寺の息子は大学に入学しました。「先人の教え」を大

切に、明治以降入植者にとって寺院は「文化の中心地」だったと言われ、その役割を果たしていました。④少年期から青年期にかけて、帯広やその他で修行し、その後音更町で鍛冶屋や板金業を開業し、社会貢献を行った方がいました。

⑤戦前に父を失い、母の手一つで育った兄弟は、母の「背中」を力に助け合い、励まし合って商店を経営した歩みは多くの人たちから褒められたえられていました。⑥十勝川温泉地域で、水田耕作を行いながら「里親制度」に協力して、親のいない子どもたちを育てました。厚生労働大臣から表彰状を受けるなど大きな感動を与えました。

こ れからも皆さんには「音更町に住んで良かった。もっとこの点を改善して欲しい」という要望を出していただきたいと思えます。町民のための町政を作るためには皆さんのご意見が必要で、心から期待したいと思えます。



今回で「おとふけ」の伝承は最終回となりますが、今後は、新たな形で町の歴史や文化について皆さんにお伝えして行こうと考えています。音更町のこれまでの歩みは先人たちが積み重ねてきた努力と英知のたまものです。先人たちが築いてこられた尊い財産を礎に、魅力あふれる郷土を後世へと引き継いでいくことの大切さを30回にわたる掲載を通じて学ぶことができました。ご協力くださった皆さんに心から感謝申し上げます。